

～広がるシーズ!新たなる可能性～

A study example introduction

私達の研究を紹介します

機械システム工学科 講師 宮本 康行



■研究分野■

- ・熱力学
- ・熱物性

■研究テーマの活躍フィールド■

- ・地球温暖化などの環境負荷が低い自然作動流体の熱力学諸性質の解明及びモデリング
- ・次世代混合系作動媒体の提案を旨とした、システム高効率化に関する解析研究

■経歴■

- 2002年 慶應義塾大学大学院 理工学研究科後期博士課程 機械工学専攻修了 博士(工学)
- 2002年 慶應義塾大学理工学部 機械工学科、助手(有期)
- 2005年 日本学術振興会特別研究員(PD)
- 2007年 富山県立大学

■Message■

慶應義塾大学・上松公彦教授のご好意で譲渡して頂いた世界最高精度の高温・高圧熱物性測定装置(3台)を継承・発展させ、富山県立大学から世界に、自然作動流体に関する有益な研究成果を発信すると共に、よりグローバルな視野からの知見を、富山県の人材育成と地域振興にダイレクトに反映させることを目指していきます。

生物工学科 准教授 磯貝 泰弘



■研究分野■

- ・生物物理学
- ・生化学
- ・蛋白質工学

■研究テーマの活躍フィールド■

- ・蛋白質機能の変変
- ・人工蛋白質のデザインと合成
- ・金属・ヘム結合蛋白質の物理化学

■経歴■

- 1990年 理化学研究所 研究員
- 1995年 ペンシルバニア大学医学部 客員研究員
- 2004年 兵庫県立大学大学院 客員助教授
- 2007年 富山県立大学

■Message■

蛋白質は、自然がデザインした高機能超分子です。天然蛋白質の特性を生かした機能性高分子の設計や、天然蛋白質に依存しない人工的なアミノ酸配列を「はじめから」デザインするデノボ蛋白質設計の研究を行っています。生物学における計算科学と実験科学の融合を目指します。

生物工学科 助教 富宿 賢一



■研究分野■

- ・有機合成化学
- ・応用微生物学

■研究テーマの活躍フィールド■

- ・酵素・微生物触媒反応を基盤とする有用物質合成への展開
- ・植物由来酵素を用いた有用光学活性物質の合成

■経歴■

- 2004年 慶應義塾大学大学院 理工学研究科後期博士課程 基礎理工学専攻修了 博士(理学)
- 2004年 理化学研究所 研究員
- 2007年 富山県立大学

■Message■

工業的な規模での有用物質の生産に役立つような、新しい酵素触媒反応の開発に取り組んでいます。新しい酵素を微生物や植物から探索し、その酵素的な研究を行うと共に、有機合成化学的手法を組み合わせて、再現性良く高い生産性を示すよう、より一層反応の精密化を図っています。

研究に関する問合せ窓口

TEL: (0766) 56-0604 (地域連携センターコーディネータ)
HP: tpu-liaison@pu-toyama.ac.jp



地域連携センター便

産学連携コーディネーター交代の挨拶



中島 良文氏

関係各位に感謝! 今後の産学連携に期待

■お世話になったお礼■

平成16年10月から今日まで、富山県立大学の産学官連携コーディネーターを担当させて頂きました。この間様々な方にお世話になりました。特に産学連携活動にご支援頂きました製菓、食品、環境関係の企業の方々には深く感謝申し上げます。また、任期半ばで交代することになり、ご迷惑をお掛けすることをお詫び申し上げます。今後は後任のコーディネーターに対して、どうか私以上のご支援を賜りますようお願いいたします。

■3年間を振り返って■

富山県立大学のコーディネーターとして強く意識してきたのは、「富山県立大学と県内企業とのお互いにプラスになる産学連携」です。その考えを念頭とし、この3年間取り組んできました。

た。しかし、大学の研究者にとっては県内企業だけが対象では不満足だったと思います。大学では世の中の最先端の研究をすることが使命です。大学の研究者が産学連携を希望する企業は研究開発に熱心な企業です。このような企業を県外も対象として産学連携に取り組む必要もあったのではないかと反省しております。

また、乏しい経験からではありますが産学連携の成功にはシーズとニーズのマッチングは勿論大切ですが、さらに重要なことは企業と大学研究者間の信頼関係であることも痛切に感じました。共同研究を進めていく過程で、大学研究者の研究に取り組む姿勢を学ぶとして強く意識してきたのは、「富山県立大学と県内企業とのお互いにプラスになる産学連携」です。その考えを念頭とし、この3年間取り組んできました。

と反省しています。

■産学連携への展望■

今後の展望として、県外企業との産学連携を強力に進めていくべきではないかと思えます。そのため、大学研究者が参加する学会にコーディネーターも参加し、大学研究者と企業の研究開発担当者との交流を深める支援を行っていくことが必要です。県内外の企業の支援を受けつつ、富山県立大学が個々の研究レベルを向上させ、より発展していけば、県民が自慢出来る「県民の大学」となり、更に大学の存在意義は大きくなるのではないかと思います。現状の課題を解決し、富山県立大学産学官連携コーディネーターがこのような活動が出来る体制を速やかに築いて欲しいと思えます。

機会を頂けたことに感謝

経験を活かして富山のために努める

福井 敏氏



■着任の背景と今後の展望■

これまで3年余り富山県立大学研究協力会のリエゾンサポーターとして、地域連携センターに所属する先輩コーディネーターの方達の業務内容を拝見させて頂きました。一方、企業に在職中は、研究・技術開発や現場の課題解決に取り組んできました。大学の研究室に足を運び、先生方に相談し、解決していた当時の取り組みは研究協力会の活動と相通じるところがあります。

その中で、転職先はこれまで得た経験を生かすことが出来る仕事に就きたいという希望があり、産学官連携コーディネーターの仕事に魅力とやりがいを感じていました。その話を中島コーディネーターに相談したところ、退任にあたり後任のコーディネーターの方を選任中であることを伺いました。

このように希望していた方向に進めたのは、リエゾンサポーターを担う機会を頂けたことがきっかけであり、とても感謝しております。まだまだ分からないことだらけですが、今後は、今あるニーズとシーズのマッチングに留まらず、新しいニーズとシーズが生み出される黒衣になれればと思います。企業と大学の交流の場を設けることでそこから新しいニーズが生まれるはず。具体的などう取り組んでいくかは、関係者の方達の意見を仰ぎ、多くのことにチャレンジしていきたいと思っておりますので、前任者の中島コーディネーター同様宜しくお願いします。

■富山のために出来ること■

私の生まれは九州です。その後大学を卒業するまで大阪に住んでいま

が、社会人として最初に就職した企業の関係で富山県魚津市に住むようになりました。今では在任年数が最も長い土地となり、富山県民としての思いが強くなります。

富山県立大学は、富山県の発展を旨とした県民の大学です。その点も踏まえ、このような機会に恵まれたのですから、大学の方針に即して富山県に貢献出来るよう取り組んでいきます。創意と工夫で現場の課題解決に力を注いできましたので、コーディネーターの仕事は自分の性分にあっていると思っております。これまでただ自己実現を目指してきましたが、今後は他者実現に努めていきたいと思えます。

関係各位の皆様には、今後ご愛顧賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。